
夜を走る

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を走る

【Zコード】

Z4586M

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

小汚い中華料理屋の店で、そつ美人でもない女に気に入られた。

俺の連れは昨日ラジオで占いを聞いたらしい。

俺の今日の運勢は、女をひとり拾う、というものだったのだろうか。
夜を走って、と言われて、俺はスクーターを盗む。

意味もなく高いだけに見えるビル群の足元にその長い長いトンネルはあった。中のライトは珍しくオレンジ色ではなく深いような深い青味の強い緑色をしていて、歩道もあつたけれど時間のせいか誰も歩いてはいなかつた。

スクーターの後ろに女を乗せて走る。

名前は知らない、さつき声をかけられたばかりで、ついでに言えばバイクも誰の持ち物なのか分からなかつた。

「運命を感じる？」

裏路地の小汚い、電飾ばかりがやたらと派手な狭苦しい店で彼女はヌードルを食べていた。ひどくつまらなそうな顔をしていたし、出入り口のところに座つていたので自然と目に入つただけで、別に取りたてての美人だとかナイスバディだつた訳じゃない。

「あたしは信じない、でも今日は立て続けに嫌な事ばかりが起つたからちょっと気分が悪いの」

透明なスープのヌードルをプラスチックのフォークでいやいや食べている女は、好き嫌いを直しなさいと怒られている子供のようだつた。そんなに食べたくないのなら残せば良いのに、と思つたけれど口に出す訳にもいかない。

「飼つてる猫が死んだわ、ママが入院した、そして男と別れたの」

連れの男はそれでも女を気に入つたらしく、ちょっとナンパしてくれる、だと、やらしてくれるかな、だと、言つて俺の腹の減り様

などまったく考えもしてくれないようだつたけれど、声を掛けに行つた連れが戻つて来て、ビールを注文していた俺に向つて真っ先に放つた言葉は「お前の方が気になるらしいよ」というものだつた。

俺の方を気にされても困る、俺は腹が減つてゐる。

「何が悲しいってあの男と別れちゃつた事よ、これからだつたのにね、すべては。だけれど終わつてしまつた事を悔やんでも仕方がないのよ、たとえ途方に暮れてしまつほど愚陋しくて死んじやいそうでもね」

とりあえずの注文で塩スープとにんにく揚げ、軟骨の唐揚げとヌードルを。最後に付け足したのは女の食べているものが気になつていたからだと、しばらくしてから氣付いた。

「別れてから氣付いたの、すぐ好きだつた事に、だけどあたしは一度終わつ

てしまつたものを信じないと誓いを立ててしまつた事があるから」

仕事帰りにラジオつけると、なんかいつも明日の運勢つていう占いが流れててさ、と連れが言つた。塩スープに揚げパンを浸して食す、思つていたよりも固いパンは古い油の味がした。

なんか気になるんだよ、その運勢。結果は半々くらいかな、良い事と悪い事、お前つてどっちを信じるタイプだ、オレは良い事しか信じたくないつて言いつつ悪い事が気になるタイプなんだけどさ。ショウマイを追加する。女が俺を振りかえつた、俺はそれを無視してビールを飲んだ。

「ね、あたしを送つて帰らない？」

「……俺の知り合いだつたつけ？」

つまらなそうにヌードルを食べていた女はそれを食べ終えたのか席を立ち、何気なくその脚を見ていた俺の方に真つ直ぐ寄つてきた。

なんの躊躇いもなかつたので、なんだかそれは良いと思つた。

「知り合いの顔を忘れるような男は知り合いに居た記憶がないわ」

「男が欲しいなら他を当たつてくれ、なんなら連れを貸そつか」

「いや、あたしはあなたがいいわ」

「何故」

「さつき、あたしをつまらない女つて目で見ながらこの店に入つてきたから」

丸めた五千円札をポケットから出し、女は濃いオレンジ色のちゃんテープルの上にバンと置いた。それから俺の連れに「この人借りるわ」と言い捨てる。俺の腕を取つて外に出た。抗おうと思えば出来たのだけれど、面倒だつたのもある。そこらのスクーターを盗んだ。そういう事は昔してはいたから、鍵をいじるのはとても簡単だ。

「どこまで送ればいいんだ」

俺は知らない人間を普段構つたりしない。

今日も構う気分ではなかつた、しかも大した女じやない。鼻が上を向き過ぎてはいるし、目は細すぎる。口がでかすぎて男を取つて食うようだつた。それなのに。

「夜を走つて」

あたしを乗せて夜を走つてよ、と女は言つた。その言い方だけが気に入ったので、俺は女を送つて行く事にしたのだ、理由なんてそんなものだ、いつだつて意味も価値もない。

スクーターを走らせて、青白いトンネルを走つた。長い長い夜みたいなトンネルだつた。女は長い髪を風に流してはいるのか、俺の背中にべつたりとしがみついて首元に何か呴いていたけれど、景色のように流された声は欠片も耳に届かなかつた。どこまで行けばいいのか知らないので、途中でバイクを止めて聞かなくては、と思つたのだけれどトンネルはなかなか終わらず、名前も知らないままに女と別れるのも人生の不思議で楽しいのかも知れないと考え、バイクを降りたらタバコでも吸おうと思つた。

連れが昨日聞いた俺の運勢は、知らない女を拾うというものだったのかな、と少し思つたけれどもバカバカしすぎて自分で笑った。夜だけが、名無しのままの俺達を許容している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4586m/>

夜を走る

2010年10月11日04時06分発行